人道的危機における文化と情報の救済
―大地震後のハイチ復興支援―

ブクエ・キストマーカー

●人道的危機における文化と情報の救済

現在、人道的危機への対応は、一般に短期的かつ即時的な性格の活動が中心となっている。災害や紛争時においては多くの危機管理機関が迅速な人命救助を優先し、より広範な問題への対処は後回しになる。こうした現状から、より広範な社会的・文化的ダイナミクスを救援活動に組み込んでいくことを目的として、被災地の社会構造や制度にも目を向けた長期的な視野に基づくアプローチが求められている。

危機的事態は、自己認識、社会的立場、地域社会の団結など、有形、無形を問わず人の生活に関わるあらゆる側面に影響を与えていく。(Chronis et. al. 2011, 352; Frerks & Goldewijk 2011)。さらに危機的事態は、経済的、社会的、政治的生活の再生を難しくする障害ともなる(Hagar 2010, 10)。こうした理由から、社会的・文化的なダイナミクスを視野に入れ、より持続的な解決策の提供、脆弱性の解消、回復力の強化に取り組むことが不可欠となる(Frerks 2011, 384-385; Frerks & Goldewijk 2011)。

また、文化的・構造的なダイナミクスに対する視点に加えて、紛争や災害は多次元的な現象であるという事実についても、詳細に検討する必要がある。災害とは「物理的かつ社会的な出来事とプロセスであり、様々な集団や個人が各々社会的に異なる形で関わっていたり、影響を受けたりするため、ひとつの現象やプロセスについても多様な解釈が生み出されていく多次元的な現象(Oliver-Smith 2001; Liu et. al. 2009」として捉えねばならない。Chronis (Chronis 2011, 352; Frerks & Goldewijk 2011)によれば、災害の持つこの特性ゆえに、緊急援助には多角的な視点が必要不可欠であり、物質的な支援(避難所、医薬品、食糧の配布など)に重きを置き、物理的、経済的、社会的脆弱性にばかり焦点を当てた現在の緊急支援対策に加えて、非物質的な支援の必要性を念頭に置いた補完的なアプローチが求められる。

被災した地域社会が文化の脆弱性に気づくのは、そこで必要最低限だとされていたものが奪われていくことによる。このためまず、文化とは何かを正確に定義しておくことが重要となる。文化的危機の専門家Frerksは、文化とは知識、信念、芸術、道徳、法律、慣習、およびその他の能力と社会の一員として身につけた習慣のすべてを包括した全体像であると論じている(Frerks 2011, 376; Frerks & Goldewijk 2011)。また、広義の文化には物質的な側面と非物質的な側面があり、地域社会の持つ意味体系、アイデンティティー、人間関係、慣習を形成する核となる(Chronis et. al. 2011, 348-349; Frerks 2011, 376-377; Frerks & Goldewijk 2011)。

何よりも、文化とは人間の基本的欲求を満たすものである。自然現象であれ、紛争によるものであれ、ひとたび災害が起きれば、そこにある文化は損傷を受ける。救援活動において文化の再生に目を向けることは、被災者に対する癒しとなり、回復力や自信へとつながっていく。だからこそ、緊急事態の渦中にある人々の精神的サバイバルを支援する上で、文化の重要性を認識して保全をはかる活動が不可欠なのである。こうした活動により、悲惨な災害を体験した人々は自らのアイデンティティーを取り戻し、正常な暮らしが続いていくという実感を得ることができる(二〇一一年Chronis et. al.の論文三四八～三四九ページ、二〇一一年Frerksの論文三七六～

三七七ページ、二〇一一年Frerks & Goldewijkの著作に引用）。

●図書館と災害

前述のように、文化的遺産は、その地域や社会のアイデンティティーであり、意味体系である。特に、文化とは、地域社会が築いて来た過去の歴史、共通の記憶、アイデンティティーだといえる。ここでいう文化的遺産には、その地域社会にとって重要な意味を持つ現在と過去の事物はもとより、それらを創造、保存、展示するための建造物や施設も含まれる（Chronis et. al. 2011, 349, 352; Frerks & Goldewijk 2011）。

一般的にはほとんど知られていないが、図書館は、社会とその生き残りのために極めて重要な文化的遺産の一部であるのみならず、危機的状況における重要なインフラとしても機能している。図書館の重要性は広く認められているが、それはひとえに子供たちが宿題をしたりコンピュータでビデオゲームを楽しんだりするための場所としてであり、緊急事態に重要な役割を果たす場所として認識されてはいない。しかし、想像を絶する規模の災害の最中に、インフラと情報力の限界が試される厳しい状況のもとで、社会の根幹に関わる深刻なダメージへの臨機応変な対応を求められても、地域行政の持つ機能だけでは限界を超えてしまう（Kapucu 2008, 243）。

図書館の司書や関係者は、物理的にも社会的にも地域に根ざした公共図書館が緊急支援と情報管理において重要な役割を果たす場所となり得ることを、その経験から知っている。一般家庭、災害対策チーム、公共機関、さらに人道的活動団体など緊急時に活躍する各関係機関のニーズの管理と対応を行う地域の調整役として、インフラと専門知識の双方を備えた図書館関係者は最適な存在となり得る（Mandel et. al. 2010, 22; TTASCHA 2012; Kapucu 2008, 256; Hagar 2010, 10-11）。

●情報資源の活用

危機的状況についての研究は、その大半が危機管理や情報伝達の視点に基づくものであった。しかし近年、危機的状況が情報資源にもたらす多様な問題が明らかにされ、より詳細な研究が行われている。危機における情報学に関する文献（危機的状況における人々のつながり、組織、情報、および技術[1]）は増加しており、こうした文献ではインフラの機能停止に対する人的対応策をはじめ、緊急時や危機対応時に発生する社会的課題などを取り上げている（Hughes et. al. 2009）。

危機的状況下では、その各局面で情報の重要性を認識しながら対応と復旧策を実施していくことが重要である（Hagar 2010, 10, 12）。非常時には情報に対する注目度が一気に増大するため、情報伝播のスピードも早くなっていくからである。（Kapucu 2008, 246）。情報管理におけるその他の課題としては、情報過多や逆に情報欠如、危機の各局面における情報に対するニーズの変化や情報の不確実性、さらに情報の発信、管理、広報を担う関係者や各機関の調整などが挙げられる（Hagar 2010, 10）。こうした問題に対処するため、被災地域の住民に災害直後から重要な情報を提供していくこと、被災者が友人や家族と連絡を取り合うために必要な情報へのアクセスを整備することが不可欠になってくる（Garrido & Patin 2012）。

さらに、被災者への情報提供や支援において、情報通信技術（ICT）の効果的かつ柔軟な活用が有効であることも分かってきた。公式情報と一般市民による情報伝達チャネルや各種団体をつなぐ情報伝達システムの一般への浸透により、危機管理の考え方にも劇的な変化が起こっている。地域社会ベースの草の根的な情報チャネル[2]などをはじめとするこうした伝達システムでは、ソーシャルメディアや地域レベルでの個人的な交流を通して情報や知識へのアクセスが行われている（Hagar 2010, 12; Palen 2010, 1, 3）。ワシントン大学のテクノロジーと社会的変動に関する研究グループ（TASCHA）が、二〇一〇年チリ大地震後、二〇一二年に実施した調査によると、インフラの損傷状況、災害対策スタッフの耐久力、地域社会の人間関係（社会的および組織間のネットワーク）により状況に違いはあるものの、現地の図書館が、緊急時の命運を分ける活動を遂行するために必要なコミュニケーションや情報アクセスを提供する役割を果たしていた[3]。被災地の図書館が、友人や

家族との連絡を支援するのみならず、復旧と再建のための行政による支援の窓口を探す被災者たちの情報源となり、さらに公共施設で様々な情報提供を行うことにより、緊急情報の伝達格差の解消にも貢献したのである（TASCHA 2012）。

●緊急時のインフラ整備における図書館の役割

緊急対策と復旧の各段階では、住民の被害の様相も多岐にわたるため（Liu et. al. 2009）、その地域の事情に詳しい図書館が、教育、連絡、情報伝達の各分野で発生する現地のニーズに迅速かつ効果的に対応できる[4]。チリやハイチの大地震発生後に、救護本部や緊急対策センターとして、さらにインターネットのアクセスポイントとしての機能を果たした図書館の存在は、地域にとって益々重要な資産として注目されている（TASCHA 2012; Kapucu 2008, 247）。

ハイチでは地震発生後、群衆化した首都圏の被災者たちが、情報（資源）や身を寄せ合う安全な場所、家族と過ごせる避難所を求めて図書館を訪れた（Mandel et. al. 2010, 25）。しかし教育的、文化的施設として建設された図書館には、これほど多くの利用者に対応する機能も設備もなかった。

図書館が非常時に機能を果たすための指針やアドバイス、参考となるベストプラクティスが何も存在しない現状を踏まえ、図書館を緊急事態対応のための重要なインフラとして活用すべきだと政府や地方自治体に訴えていく必要がある（Mandel et. al. 2010, 22, 24）。図書館ネットワークは、他の各情報機関と協調協働体制を確立し、緊急時に地域を超えた対応力を備える必要がある。具体的には、インターネット、情報管理技術、および地理的情報システムをはじめとする情報技術を充実させ、人道危機における緊急対策で、より確かで広範な支援を行えるよう備えねばならない（TASCHA 2012; Kapucu 2008, 257; Mandel et. al. 2010, 23, 26; Garrido & Patin 2012, 14）。

●ハイチの復興と再建支援

国境なき図書館（Libraries Without Borders, 以下LWBとする）は、文化と情報をベースに国際的な地域開発に取り組む非営利の国際組織であり、現在二〇カ国以上で活動を行っている。LWBは、社会と経済の発展に知識や情報へのアクセスが重要な役割を担うことを認識し、図書館の建設、司書の研修、書籍の提供、地域出版社への支援、図書館ネットワークの拡充、文化的遺産の保護、情報手段の有無による社会的格差の解消に取り組んでいる。二〇〇七年の創設以来、LWBは地元関係者主導による被災地支援活動を実施している。これは、被災地域のニーズと地域住民自身の参加をベースにLWBが調整役として参加することにより、被災地住民の自尊心、責任感、独立心を高めていくことを目的としたアプローチである。

LWBは、図書館の存在が、人道支援や被災地の再建と持続的な発展に向けた活動における格差解消の重要な鍵となることを念頭に置き、被災地のニーズに対応している。現在に至るまで、LWBは被災地への迅速な支援を行うとともに、人道的危機における支援目的の介入に関する長期的な対策も視野に入れながら活動してきた。被災地の救援活動を行う各組織では、活動方針と実際の活動内容の格差が問題となっている。人道支援を行う団体では現地の文化に対する配慮がおろそかになりがちであり、また文化的支援を行う組織では、被災地に派遣した調査チームが実際に現地で発生するニーズに迅速で具体的な対応策を提供できないこともある。LWBは、被災地の文化救済のために活動する様々な団体と同様に、こうした格差を解消していくことを目標としている。（Chronis et. al. 2011, 349; Frerks & Goldewijk 2011）。

過去四年間に、LWBはハイチ社会の文化と教育の救済と持続的発展に関するいくつかのプロジェクトに取り組んできた。二〇一〇

国境なき図書館の活動。2010年大地震発生後、ハイチ、ポルトープランスにて（撮影　ピエール・ドゥイケル Pierre Duykerts　©国境なき図書館）

年のハイチ大地震では、首都ポルトープランスにある大学図書館の半数以上が壊滅的ダメージを受け、無数の書籍が破壊され、学校、大学、地域の図書館が閉鎖を余儀なくされた。ハイチの再建への取り組みには知識と情報が重要な鍵となると考え、LWBと協力団体で首都内外のニーズを特定するための調査活動を実施し、被災地の逼迫したニーズに対応した。また、地震により甚大な被害を受けた各地域で被災者が書籍や知的資源を利用できるよう整備する活動にも取り組んできた。

さらにLWBは、国連児童基金（UNICEF）の要請を受け、緊急事態における迅速な心理社会的支援の一例として「ストーリー・ボックス」と名付けた活動をポルトープランス地区のテントや避難所に住む国内被災者向けに展開した。学校に生徒が戻りはじめる復興の段階では、通学をはじめた生徒と避難所に残る生徒の双方を支援するために必要な道具の提供が重要である。また、被災者たちの嘆きの気持ちを消化していくプロセスにおいては、地震で受けた精神的なダメージを克服するために日常的な活動を再開させることが不可欠である。ストーリー・ボックスの活動では「読む楽しさ」を発見するための文化的、教育的な活動を通して読み書きの勉強を支援するとともに、若者たちが読書に親しめるよう小さな移動図書館[5]の提供を行った。

ハイチの教育関連機能（建物、インフラ設備、組織的および社会的資産）は破壊もしくは壊滅的な被害を受け、教育部門は深刻な状況にあった。国内の教育機能が地域社会の取り組みによりいずれ再建されていくことを前提にしつつも、LWBは現地の教育機能を補強するためのプロジェクトに取り組んだ。ハイチ国家大学（L'Université d'État d'Haïti）では一二の図書館のうち一一カ所が地震により大きな被害を受けていたが、二〇一一年の授業再開を目指し、ハイチの学生、研究者、教授たちが技術および科学関連の情報を利用できるよう、LWBの迅速な対応により大学初の電子図書館が開設された。さらにハイチ外務省を支援するため、ポルトープランスに法律と国際関係の資料を揃えた図書館を開設するための援助も行った。文化的遺産である建造物の破壊は、被災地の住民に根本的な喪失感を与えてしまう。被災地域が共有する記憶に対する敬意と保護は、住民に希望と慰めをもたらし、地域のアイデンティティーと継続性回復の力となる（Chronis et. al. 2011; Frerks & Goldewijk 2011, 352）。こうした理由から、地震から一カ月後には、作家Jean Euphele Milceをリーダーとして、行政当局の公文書保管担当者や図書館司書たちから成るチームが、ハイチの二〇〇年にわたる外交史を物語る文書を廃墟から回収する活動も実施した[6]。

さらにLWBによる代表的な活動として、ハイチ初の移動図書館サービスBiblio Taptapsが挙げられる。このサービスは、ポルトープランスの北部と中心部にある貧困地域に住む一万五〇〇〇人以上の人々を対象に毎月実施されている。Taptapの名称は、ハイチの歴史や風景、国のイメージを代表する共同タクシー（車体に見事な装飾を施したバスや軽トラック）にちなんでつけられた。貧困地域の道路沿いや収容施設の近くで実施することにより、Biblio Taptapsは単なる移動図書館としての機能を超えて、地域の人々が集まり、本を読み、話し合い、議論を交わす場となり、さらに地元の各団体が環境教育からコレラ予防に関するものまで様々な教育的ワークショップを開催する会場にもなっている。

LWBは、小規模図書館や学習センターの開設といった教育的、文化的な取り組みこそ人道支援において優先されるべきであるという信念に基づき活動している。こうした取り組みは、人々に生きる力を与え、被災者が精神的ダメージに立ち向かう力となる。書籍や情報資源の提供は、被災者が失ったものを取り戻し、究極的には危機にあっても知的興味を持ちつづけ、自尊心と回復力を生み出すための手段となる。前述したように、電話や地理的情報ツール、家族の再会や地域社会の活動のための場所の提供を通して、図書館は、地域住民同士の、さらに住民と支援者たちとのコミュニケーションを活性化させる場所となり得る。こうした支援機能の提供により、各地域の情報や暮らしの中心となる施設は、緊急事態後の正常化と継続性の回復のための重要な役割を果たすことができるのである。

二〇一二年一一月二八日、国境なき図書館（LWB）は「読むことの重要性：人道的危機における書籍と情報資源」と名付けた国際キャンペーンを開始しました。この活動では、国際的な開発の枠組みの中でおろそかにされがちな問題への意識を高めることを目的としています。キャンペーンの詳細とLWBに関する情報は、LWBのウェブサイトwww.urgencyofreading.org-www.librarieswithoutborders.org.でご覧ください。

（Boukje Kistemaker／国境なき図書館アドボカシー・調査開発プロジェクトオフィサー）

《注》

(1)Hagerによる二〇〇六年、二〇一〇年の論文より

(2)例として、関係機関同士の共同作業の第一歩となる危機管理マップが挙げられる（Barbier 2012, 10）。「ウシャヒディの災害紛争情報地図（Ushahidi, Alert Map）」を参照。

(3)詳細は、二〇一二年Barbierによる論文、Enpowering the Public with Information in a Crisis（EPIC）を参照。

(4)Shknovski他（二〇〇八年）の研究によると、救援と再建の段階で情報伝達技術の継続活用が多くの犠牲者の生活に役立ち、さらに復興の段階では複数の事例で地域社会の団結の回復に役立った（Hughes et. al. 2010）。

(5)移動図書館は、フランス語とクレオール語で書かれた数百冊の書籍を収納したトランクと、動画によるガイダンスおよび各種資料から構成されている。ストーリー・ボックスはハイチ国内三〇〇カ所のユースキャンプに送られ、UNICEFと、その協力団体により運営されている。

(6)LWBは、この活動を物資と物流の両面から支援し、一方、緊急活動チームは回収したすべての文書を旧官庁に隣接した建物に収容した。回収文書と資料を保管するために必要な建物の修繕と改修に際し、LWBでは技術的支援、書籍の提供、書籍を収納する棚や備品を提供した。

《参考文献》

①Barbier, G. et. al. 2012. Maximizing Benefits from Crowdsourced Data. *Computational and Mathematical Organization Theory*. September 2012, Volume 18, Issue 3, pp. 257-259.

②Frerks, G. E.; Klein Goldewijk, B. (Eds.) 2011. *Cultural Emergency in Conflict and Disaster*.Rotterdam: NAi Publishers.

③Hagar, C. 2010. Crisis Informatics: Introduction. *Bulletin of the American Society for Information Science and Technology, June/July 2010 36 (5): 10-12*. Graduate School of Library & Information Science, Dominican University, River Forest, IL, USA.

④Hagar, C. 2010. *Crisis Informatics: Educating Information Professionals*. Retrieved from: http://www.drs.dpri.kyoto-u.ac.jp/jp-uk/esrc/pdf/110610seminar/christine_hagar.pdf.

⑤Hughes, A. L. & L. Palen 2009. Twitter Adoption and Use in Mass Convergence and Emergency Events. *Proceedings of the 6th International ISCRAM Conference, Gothenburg, Sweden, May 2009*. J. Landgren and S. Jul, eds.

⑥Garrido, M. & B. Patin 2012. *Dynamic Library Services during Extreme Events: The Case of the 2010 Earthquake and Tsunami in Chile*. American Library Association & ATACH; Technology & Social Change Group, University of Washington, Information School.

⑦Kapucu, N. 2008. *Collaborative Emergency Management: Better Community Organising, better public preparedness and response*. Journal Compilation ODI.

⑧Liu, S. B. et. al. 2008. In Search of the Bigger Picture: The Emergent Role of On-Line Photo Sharing in Times of Disaster. *Proceedings of the 5th International ISCRAM Conference, Washington, DC, USA, May 2008*. F. Fiedrich and B. Van de Walle, eds.

⑨Liu, S. B. & L. Palen 2009. Spatiotemporal Mashups: A Survey of Current Tools to Inform Next Generation Crisis Support. *Proceedings of the 6th International ISCRAM Conference, Gothenburg, Sweden, May 2009*. J. Landgren and S. Jul, eds.

⑩Mandel, L. H. 2010. Crisis Informatics: Helping Libraries Prepare for the Storm with Web Portal Technology. *Bulletin of the American Society for Information Science and Technology, June/July 2010 36 (5): 22-26*.

⑪Palen, L. et. al. 2010. A Vision for Technology-Mediated Support for Public Participation & Assistance in Mass Emergencies & Distasters. *Proceedings of ACM-BCS Visions of Computer Science*.

⑫University of Washington; Technology & Social Change Group, Information School 2012. *Disaster Response in Chile, Research Brief*. Retrieved from: https://digital.lib.washington.edu/dspace/bitstream/handle/1773/19638/TASCHA_Chile_Disaster_Brief_20120224.pdf.